

第3節 サブカルチャー教材を用いた国語科カリキュラム構築のために

1 カリキュラム構築のための授業構想に向けて

本研究では、サブカルチャー教材の開発とそれを用いた国語科の授業開発について、具体的な授業実践に即して提案を続けてきた。それは、学習者の国語科に対する興味・関心の喚起のための方略でもあった。ところで実際に学校教育の現場で授業を展開する際には、年間の指導計画を常に勘案しつつ、個々の授業の計画を進める必要がある。そこで本節では、サブカルチャー教材を扱う授業を年間指導計画の中にどの程度、どのように位置付けたらよいかという課題について言及する。

まず初めに、カリキュラム構築のための授業構想について要点を整理してみたい。カリキュラムについての検討は教師の最も基本的な仕事である。明確な指導目標に即して具体的なカリキュラムを構築し、価値ある授業を構想し実践することは教師の基本的な力量の一つにほかならない。わたくしたちは常に自らの授業を反省しつつ、より効果的な授業を創造しようとしている。授業において何らかの課題への対応が迫られたときには、常に通時的かつ共時的な視点から問題をとらえて検討を加えるべきである。効果的なカリキュラム構築のためには、通時的かつ共時的な観点からの研究、すなわち国語教育史の研究や同時代の実践報告の分析が必要不可欠な所以である。わたくしたちは、国語教育史の研究を続けながらも、同時代の様々な実践に注意深く目を向けなければならない。そのうえで、常に効果的な授業の構想に向けて、意欲的な姿勢を貫く必要がある。

実際の授業構想のために必要となるのは、次の四種の項目である。

- ① 目標 その授業で何を指すのか、どのような国語の学力を育成するのか。
- ② 教材 どのような教材を使用するのか。目標達成のために必要な教材とは何か。
- ③ 指導法 どのような授業を展開するのか。指導過程をどうするか。学習指導の具体的な形態をどうするか。
- ④ 評価 第一の「目標」と対応した評価をどのように実現するのか。評価の観点と方法をどのようにするのか。

特に指導法について検討するためには、具体的な指導過程の構築が必要となる。そこで続いて、具体的な事例に即して実際の授業構想の方法について考えてみたい。事例は「読むこと」の領域に関する学習指導、特に小説教材を用いた授業を例として取り上げることにする。特に第三の指導法を検討するうえで配慮しなければならないのは、次のような事項である。まず物理的・形式的な側面からは、次の二点が挙げられる。

- ① 年間指導計画における位置付けを明確にすること。
- ② 配当時間を考慮した指導計画にすること。

第一の点は、一年間の授業の中で導入の段階のものか総括の段階のものかによって、授業内容が異なるということである。また第二の点は第一の点とも関連するが、十分に時間をかけて扱うのか、短時間で簡潔に扱うのかということをおろそかに決めておくということである。この二点に関しては、常に意識したカリキュラムを構築しなければならない。

続いて授業内容に関わる事項としては、次のようなことを考慮する必要がある。

- ③ 授業の中で、学習者の具体的かつ総合的な言語活動が展開されるようにすること。
- ④ 個人、グループ、クラスの各段階で有意義な学習活動が展開され、インタラクティブなことばのコミュニケーションが実現されるようにすること。

第三の点は、教師主導型の一方的な授業形態ではなく、学習者の「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」にそれぞれ関わる具体的な言語活動が授業中に達成されるように配慮することである。第四の点は、配当時間に応じて多様な形態の学習を展開し、ことばによるコミュニケーションが十分に実現されることを意味する。さらに第一から第四までのいずれの事項にも共通するものとして、学習者中心の発想がなければならない。学習者の主体的な学びを支援するための授業構想が求められることになる。

三浦和尚は、小説教材の読解過程を次の四つの層としてとらえている¹。小説教材を読むための授業を構想するときに参考になる考え方である。

- ① 文字・語句を読む—文字が読め、語句の一般的な意味がとらえられる。
- ② 文章を読む—文脈上の意味がわかり、そこに描かれた事象がとらえられる。
- ③ 作者を読む—作品の主題や作品の背後にある思想がとらえられる。
- ④ 読者（自身）を読む—自己とのかかわりにおいて作品がとらえられる。（作品世界を通して自己を発見する）

配当時間にゆとりがある場合には、これらの四つの層の学習を個人・グループ・クラスをそれぞれ単位とした学習において実現するような指導過程を考えてみたい。第一の層は、個々の学習者が辞書を調べるなどして個人レベルで学習し、教室での一斉授業の中でそれを検証する。一斉授業は教師主導で展開するが、その段階では主として第二と第三の層について学習する。そして、グループ学習の形態によって第三の層をさらに深める。グループ単位の学習成果をクラス内で発表することによって、作者を読むという層はさらに深まってゆく。そして最終的に、学習した小説について感想をまとめたり自由に論述したりするなどの活動で総括となるわけだが、それは読者を読むという層になる。

教室での一斉授業の後は、学習の場所を図書室に移して、5、6人のグループによる学習を展開する。グループ学習の成果は、研究発表という形態でクラスに還元する。このようにして、小説をまず個人で読み、続いてグループで、そしてクラスで読む。様々な読みの交流を通して、個人の読みが次第に深まるように配慮したい。総括の段階で参考に音声や映像資料を紹介して、発展的な読書へとつなげることも大切である。以上のような要素を踏まえて、現場の実態に即した授業を構想することができるだろう。

効果的な授業を構想するためには、第一に緻密な教材研究が必要となる。教材研究を深めることによって、授業の核心が見えてくる。その教材を通して授業で何をすべきか、教材をどう扱うのかをそれぞれ明確にしなければならない。教師自身がその教材をいかに深く読んでいるかが、授業の質を決定することになる。

次に重要なことは、教室での実践を着実に積み重ねて、その実践の成果を常に厳しく検証するという努力である。わたくしたちは常に、現場での実践を通して多くを学んでいる。特に研究授業のような特別の場でなくとも、実践記録を通して地道な授業研究を継続したい。実践を通して、授業構想はより確かなものになる。

そして第三点として、何よりも大切なのは学習者の現実を知ることであろう。彼らがいま何を考え、何を求めているのかを掌握しなければならない。虚心に彼らの声に耳

を傾けて、その現実にアプローチを試みる必要がある。一人ひとりの学習者の現実がよく見えるようになれば、その現実に対応する効果的な授業が構想できるはずである。

現場の仕事が多忙を極めるようになって、授業構想に十分な時間を取ることが困難になりつつある。しかしながら、安易にTMの指導過程をそのまま取り入れたり、何年間も続けてまったく同じ指導過程の授業を繰り返したりすることは避けて、常に効果的な実践のための授業構想を心がけたい。

2 「投げ込み」としての位置付けをめぐって

年間指導計画について考える前に続けて検討したいのは、「投げ込み」としての扱いである。すなわちそれは、授業の進度を調整する際などに1時間程度の短い時間にまとまった内容を扱うという方向であるが、サブカルチャー教材の場合、この「投げ込み」教材の授業における位置付けがきわめて重要になる。そこで、以下にこの「投げ込み」についての考察を試みることにする。

中学・高校では一人の教師が複数のクラスを担当するのが一般的であるが、たとえば定期試験の前などにクラス間の進度の調整が必要になる場合がある。試験範囲とした箇所の授業が終了した後の教室では、自習の時間を設けたりして調整をする。また特別の学校行事や学年行事等の関係から、クラスによって授業時間の有無に差が出ることがある。さらに担当者が出張に出たり欠勤したりして補講をすることになったときには、どのような授業を展開するかを検討する余裕もなく、当該の授業が自習時間の扱いとなる。

このような場合には、担当する教員が「投げ込み」教材による授業という形態によって1時間で完結する内容を扱うことになる。せっかく設けられた授業の機会を安易に自習とするのではなく、日ごろから短時間で扱うことができるような授業内容を用意しておくという配慮も必要である。本研究において紹介したサブカルチャー教材を用いた授業は、このような配当時間が1時間の場合に優れた効果を発揮することができる。日常の授業の展開とは異なる内容に興味を寄せる学習者もあるだろう。また自習時間に教室を訪れた補講担当者の授業から、国語科への関心が芽生えるという可能性もある。年間を通した学習指導計画を充実させる一方で、随時「投げ込み」の扱いで授業が展開できるような計画も蓄えておく必要がある。

このような「投げ込み」の授業においては、特にサブカルチャー教材を用いて学習者の興味・関心を喚起するまでもなく、教科書教材の「読み聞かせ」を実施するだけで十分な効果がある。教師による「読み聞かせ」が契機となって、文学の世界に開眼したという学習者もいる。彼らの集中力や教室内の様々な環境から実現には困難を伴うことではあるが、1時間で読むことができるような小説を教師が読んで聞かせることができればよい。朗読テープや映像も出ているが、教師自身の声による読み聞かせによって学習者に文学作品と出会う機会が提供されることに挑戦する価値はある。読み聞かせでは、特に教材を印刷して配布する必要もない。急に設定された授業の際にも、手軽に導入することができる。効果的な読み聞かせのための教材発掘と、朗読の技術の習得は国語教師にとって重要な課題となる。

日ごろから1時間で扱うことができるような長さの教材を数編用意して、「投げ込み」教

材として授業の際に印刷して教材とすることができれば理想的である。2003年度に使用された高等学校の「国語総合」という科目では、次のような「掌編小説」とも称されるような短編小説が教科書で教材化されている。なおここでは出版社名は省略し、作品名および後のカッコ内には収録された教科書のページ数（何ページ分の分量かということ）を示す。

武田泰淳「信念」（3ページ）

菊池寛「形」（4ページ）

河野多恵子「少女」（4ページ）

干刈あがた「レバー・ストーン」（5ページ）

江國香織「子供たちの晩餐」（6ページ）

葉山嘉樹「セメント樽の中の手紙」（6ページ）

これらの小説はいずれも短編小説としての完成度は高く、短いながらもしっかりと読ませる要素が含まれた内容である。たとえば菊池寛の「形」はすでに教材化の歴史は古い作品だが、多様な授業を構想することができる。「槍中村」と称され、鮮やかな「猩々緋と唐冠の兜」で先陣の功名を重ねていた新兵衛が、若武者にその「形」を貸し与えて自らは二番槍を務めたそのとき、いつもとは明らかに状況が違うということに気づく。そして結末で「敵の突き出した槍が、緋の裏をかいて彼の脾腹を貫いていた」という悲劇が訪れるわけだが、この一文をあえて削除したものを教材とするように工夫する。作品の展開を辿りながら、結末にはどのような事態が待ち受けているのかを自由に想像させたいうえで、作品のストーリー展開を的確に把握し、作中の因果関係に基づく結末を想像するという活動によって、小説に対する彼らの興味を喚起することができる。

原作の結末を紹介した後で、今度は創作的な活動を取り入れることにする。「形」の歴史小説としての設定をそのまま現代に移行して、身近な現代社会におけるストーリーとして再構成するという課題を課す。どのような人物を想定して、どのような事件に関与させるのかをいろいろと考えさせるわけだが、これは人物およびストーリーの設定が明確な作品だからこそ可能な活動である。このようにして、1時間という授業時間の中で、「形」という歴史小説について理解と表現の両面から関心を深めることができる。先に掲げた「国語総合」の短編小説教材は、それぞれの作品にふさわしい学習課題を工夫することによって、十分に「投げ込み」の授業で使用できる教材となるはずである。

1時間の授業時間内で扱うことができる小説教材の第一条件は、やはり長さという点である。教科書教材となった作品の多くはこの長さという観点から選定されたものと思われるが、特に「投げ込み」授業の場合には長さの問題が絶対的な条件となる。第二には、題材が学習者にとって親しみやすく分かりやすいという点も、重要な条件となる。そして第三の条件として、短いながらも小説としてのドラマチックな展開があるという点も考慮しておきたい。それは必ずしもショートショートに見られるような「落ち」を意味するわけではないが、日常性の中に潜む人生の真実を垣間見ることができるようインパクトがほしい。短時間の授業であるだけに、作品自体の持つ魅力によって授業の内容が保障されることになる。

「投げ込み」教材の最大の特徴は、教材の鮮度という点にある。教科書教材は、教科書編集にかかる時間を考慮すると、どうしても何年か前の素材に限定されたものになる。「投

げ込み」教材は、リアルタイムな素材の教材化が可能であることから、学習者にとってインパクトのある内容を取り入れることができる。

そして「投げ込み」教材を用いた授業の特徴は、学習者が気楽に受けることができるということにある。「試験」や「評定」に直結するものではないという前提が、彼らの関心を授業そのものへと向かわせる。小説教材を扱うことによって、彼らが小説の魅力に出会い、発展的な読書へとつながるきっかけとなればよい。ただし逆に考えれば、授業自体に魅力がなければ成立しないという厳しさを考慮しなければならない。自習の時間に訪れた教師が、別の授業をするということを歓迎する教室は稀である。

今回は特に小説教材を話題にしたが、もちろん評論・論説教材、さらに言語や表現の教材も含めて多くの「投げ込み」授業用の教材を開拓しておきたい。そして、本研究で取り上げたサブカルチャー教材の授業では、多くは1時間という授業時間の中で完結する授業内容と方法とが特徴でもあった。たとえば第3章の第3節で紹介した佐藤雅彦の漫画や、第4章・第3節で紹介した宮崎アニメの授業は、いずれも「投げ込み」の形態で扱うことが可能である。そこで「投げ込み」授業という形態に改めて目を向けてみたい。教材発掘、指導技術の双方から、授業創りに向けての様々な配慮ができるからである。日ごとに教師の多忙な状況が深刻になりつつある現在、常により授業を構想しようという意欲こそが教育の原点を支えることができる。

3 年間指導計画を立てる際に―「読むこと」を例として

続いて年間指導計画の問題を取り上げる。まず中学校、高等学校ともに低学年の場合から話題にしたい。低学年の授業は、年間指導計画の中に上級学年に向けての導入という要素を加味する必要がある。学校生活の出発の時期において、国語科に対する学習者の興味・関心および学習意欲を喚起し、学習の習慣を身に付けることの重要性は言うまでもない。あわせて、基礎的な国語の学力を育成することにも配慮することになる。さらに低学年の学習指導においては、学習の方法に関する指導も必要になる。学習者の声として、国語科は領域が曖昧なうえにどのように学習したらよいのか分からないというものが多いことはよく知られている。

国語科の授業では、読みの指導が主流になっている。上級学校への進学のための入学試験において主に読解の問題が出題されるということが、理由の一つである。学習形態が多様化しつつある中で、国語科ではやはり「読むこと」の指導が中心になっているのが現状である。国語科教科書においてもまず読み教材が多く配列されている。

「読むこと」の学習指導を実践する場合、ともすると教材を「読んで、説明して、分からせて、暗記させる」という一斉授業の形態による指導過程になりがちである。それでも教師は発問をあれこれ工夫して、学習者との対話を実現するように努力をしたり、授業中に学習者が活動する場面を入れたりして、講義を中心とした授業のみに偏らないように留意している。ただしそれだけではなく、一斉授業という形態自体を見直して、学習者がより主体的に学習を展開できるような方法を取り入れるように配慮してみたい。

学習指導計画を検討する際には、まず授業で扱う教材を吟味するところから出発する。教科書教材の中から選ぶことを前提として、特に複数の担当者で同一学年を担当する場合、

担当者相互のコミュニケーションを密にして選定することになる。基礎的な読みの学習が展開できるもので、なおかつ学習者の興味・関心を喚起できるような内容の教材が好ましい。文学的文章、特に小説教材となると、現代作家の作品も積極的に取り上げたいところではあるが、低学年の段階で基礎的な読みの指導を展開するためには、オーソドックスな教材が適切である。いわゆる「定番教材」の場合は、先行の教材研究や実践報告も多く出されていて、授業の準備を円滑に進めることができるという利点がある。

学期ごとに指導計画を立案する場合には、一つの学期に複数のジャンルを扱う場合と、たとえば1学期は文学的文章中心、2学期は論理的文章中心というようなジャンルによって分ける場合とがある。さらに担当者による独自の指導計画に基づいた授業を展開する現場もある。学期を通して小説を読むという授業もある。その現場の状況によって多様な指導計画が考えられるわけだが、ある程度は時間に余裕のある計画が理想的である。

1学期の授業では新たな学年において学習者が最初に出会う教材であるということを勘案して、その教材の読みの学習だけではなく、文章の読み方に関する指導という意味合いも込めた指導計画を検討する。小説教材の場合なら、人物、情景、心情などを把握し、場面展開や表現の特色などについて、ポイントを絞って学習する。どのような指導事項を扱うかという点については、十分に吟味して効果的な授業が展開できるように配慮したい。夏休み期間に学習指導計画を見直す際には、1学期の成果に立脚した検討が求められることになる。学習した内容を引き継ぎながらも、新たな形態の学習を交えてより発展した内容を盛り込むことを前提として、1学期とは異なる方法を取り入れた指導計画を検討したいものである。

1学期に一斉授業を中心とした学習を展開した場合、2学期にはグループ学習を導入するというように、学習の形態を変えることも学習者の興味・関心の喚起に関連する。一つの教材を扱う際にも、導入の段階を一斉授業で実施してから、展開の段階でグループ学習を取り入れて、総括のときに再度一斉授業に戻るといった指導過程が考えられる。グループ学習の進め方に関してはすでに言及したが、グループ学習を進める場合、準備の段階からすでに教師側の負担は一斉授業よりも大きい。指導計画を綿密に練る必要がある。

グループ学習を展開する際には、各グループにどのような研究課題を与えるかという点から検討しなければならない。全体に同一のテーマを課す場合もあるが、多くは複数の研究テーマを設定してグループごとに分担する。研究課題の担当希望によってグループを編成する場合もある。すべてのグループに分担した研究課題をどのように協議するのかという点、すなわち学習の方法について具体的かつ的確に指示をすることが最も重要な点である。そして授業の前後にリーダーを集めて学習方法に対するアドバイスをしたり、授業中に各グループを巡回して効果的な指導を推進したりしなければならない。グループによって異なる作業をすることもあるので、きめの細かい学習指導が求められる。そしてグループ学習の成果は、研究発表によってクラス全体にフィードバックするようにしたい。発表を実施する場合、その準備にも十分な時間を取らなければならない。全体として余裕のある配当時間が確保できないと、グループ学習という形態自体が成立しない。さらに全体の評価をどうするのかを含めて、対応を迫られる問題は少なくはない。しかしながら、相応の成果は十分に期待できる。固定した授業パラダイムを見直すことは、まさに本研究のテーマに直結する課題である。

4 サブカルチャー教材を用いたカリキュラム構築のために

続いて、本研究で取り上げたサブカルチャー教材を用いたカリキュラムについて検討したい。年間指導計画の中に最も組み込みやすいのは、前述した「投げ込み」の扱いである。すなわち授業時間に余裕がある場合の、1時間から2時間程度で扱うことを前提にしたカリキュラムということになる。しかしながら、「投げ込み」の扱いのみに依拠するのでは、もちろん授業の効果はさほど期待できない。指導計画に確かな位置を占めるためには、大きく分けて次の三つの方向がある。

① 教科書教材を扱う際に、その教材と関連させて扱う方向。

この方向は、たとえば教科書に集録された詩歌と関連させて、J-POPの歌詞を扱うというものである。導入として用いることも、反対に先に教科書教材を扱った後で総括や発展として扱うことも可能である。この場合、サブカルチャー教材は決して副教材として扱う必要はない。教科書教材と同等の位置に据えることもできる。本研究における第5章の第4節で紹介した実践のように、教科書教材を扱った後で、テレビゲームの方法を取り入れて創作的な活動を展開する場合は、この方向に相当する。

② 教科書教材の代わりに、教材を差し替えて扱う方向。

この方向は、教科書教材が目指す活動をそのまま引き受けた形で、新たにサブカルチャー教材を用いるものである。たとえば第6章の第2節で紹介した『アンダーグラウンド』による実践は、この方向に相当する。すなわち、教科書教材を扱う代わりに、サブカルチャー教材を扱うわけである。まさに「主(本)教材」として、サブカルチャー教材を位置付けることになる。今後推進すべきはこの方向である。

③ 年間を通した学習課題として、教科書教材と並行して扱う方向。

この方向は、特に教科書教材に関連させたり、また教科書教材の代わりに主教材として扱ったりするものではなく、教科書教材を用いた授業と並行して、年間を通した学習課題のような形態で扱うものである。本研究で紹介した実践では、たとえば第7章の第2節で言及した「ワードハンティング」のように、1週間に1語ずつことばを集めるという活動を取り入れるというものである。

以上の三つの方向を、効果的に年間指導計画の中に取り入れることが求められる。サブカルチャー教材による授業を展開する一つの目安として、特に第一と第二の方向では、各学期に一つずつの割合で取り入れるということを考えてみたい。

サブカルチャー教材による授業が学習者の興味・関心を喚起できるのは、それが国語科の授業における「日常」の常識を超えた「非日常」の素材であるということにもよっている。仮に年間を通してサブカルチャー教材ばかりが登場するような授業では、せっかくの学習者の興味・関心も色褪せたものになってしまうだろう。その点には注意が必要である。

5 評価の問題をめぐって

本節の末尾に、評価に関する問題についてまとめて言及しておきたい。特に中学校に絶対評価が導入されてから、評価の問題が様々な形で現場に広がっている。その最大の問題

点は、目標や指導から切り離されて評価のみが一人歩きしているという点である。特に中学校の現場では、絶対評価に振り回されて、目標や指導そのものに対する配慮が不十分になるという危惧がある。そして評価規準の細分化によって評定の算出が煩雑化することに伴って、教師の業務量が増えて十分な教材研究の時間が確保しにくくなっているのも事実である。説明責任が厳しく問われる反面、客観性が尊重される代わりに評価する教師の顔が見えにくくなってしまった。その結果まさに評価のための評価になって、教師と学習者との人間的な関係がますます希薄になりつつある。実際に評価の対象となるのは即時的評価のみ、評価対象となった個々の能力のみということで、長期的・総合的な観点からの評価が実施しにくくなっている。このような問題は克服されなければならない。

学習指導と一体化した、学習指導に生きる評価の実現が求められている。改まった評価ではなく、日常の学習指導における評価、特に形成的評価を充実させる必要がある。そして、教師と一人ひとりの学習者との触れ合いを尊重した評価の実現が必要である。画一的な到達規準を掲げるだけではなく、可能な限り個々の学習者の現実を的確に把握した評価を目指したい。また断片的な評価ではなく、継続的な評価を心がけなければならない。いま話題になっているポートフォリオ評価の活用なども前向きに検討したい。堀江祐爾が説く「さまざまな『眼』による評価」²も大切である。評価に関する教師の問題意識喚起と評価研究の実現が今後の重要な課題である。学習指導要領や指導要録のみに縛られず、常に真の学力や評価に対する探求の姿勢を持続させたい。

国語教育の活性化を考えるに際して、評価の問題を避けて通ることはできない。授業の構想においても、評価をどうするのかという点は、必ず明確にしなければならない課題である。たとえば「話すこと・聞くこと」の評価の在り方に関しては、第一に「話すこと・聞くこと」の活動が日常的に行われるものであるだけに、特に日常の学習指導と一体化した評価が求められる。第二には、活動を経験すること自体に意味があることが多い。経験自体が学習であり、国語の学力に直結することに注意して、安易に技能主義に陥らないようにしたいと思う。第三として、自己評価を重視するという点を掲げておきたい。例えば、話し合いの学習をする際に特に留意したいことを、あらかじめ学習者に上げさせるなどして、学習の意識化を図る必要がある。そして第四としては、子どもたちに直接声をかけたり、本研究で繰り返し紹介した「研究の手引き」と「授業レポート」を用いた学習指導を実施して、「授業レポート」に小まめに評価言を書いたりして、彼らの学習意欲を喚起するような配慮がほしい。その点こそが、評価の大切な目標となるのではないだろうか。コンピュータの普及によって、教師と一人ひとりの学習者との間に直接対話をする時間が減少している。本来、IT機器の導入は教師の事務的な業務を軽減し、よりシステムティックな学校業務の推進を目指すものであったはずである。評価の場面でも、評価の観点等が整理され、細かいデータが正確に算出できるようになったが、それはかつての教師による手書きのコメントよりも効果的かどうか疑問である。もっと直接学習者と接して対話を密にしたうえで、彼らに励ましのことばをかけること、そのような評価の原点とも言える風景を大切にしたい。

本研究において最大の目標として掲げたことは、いかにして国語に対する学習者の興味・関心を喚起するのか、という課題であった。そのために、学習者に身近な場所からサブカルチャー教材を発掘・開拓し、その教材を用いた授業の構想を検討したうえで、実践

を通してその効果を検証してきたことになる。本研究では、わたくし自身の中学校および高等学校における実践の記述を中心とした。授業を通して学習者の中に芽生えた国語科に対する興味・関心を大切にしたい。かつて東洋が述べたように³、学習者に対してその教科を好きにすること、そしてやれるのだという自信を付けることこそが教育評価の原点にある。

時代とともに、子どもたちの現実も変容する。わたくしたちは、彼らの実態にしっかりと向き合う必要がある。そして常に学習者を中心とした授業創りを推進したいと思う。これまで繰り返し述べてきたように、国語科に対する学習者の興味・関心を喚起することが、国語教育の最大の課題である。本研究では、教材開発および授業開発という方向から、そのための様々な方略を提案した。それはまさに、「境界線上の教材を用いた国語教育の戦略」というキーワードで括ることができるものであった。

注

- 1 『「読む」ことの再構築』（三省堂、2002. 10）による。
- 2 堀江祐爾は「学びを支える複眼的な評価」（『月刊国語教育』2006. 3）において、「学級内他者」「学校内他者」「学校外他者」「自己評価」「国語科担当教師評価」などの「複眼的な評価」の活用を、これからの教師の重要な役割として論じている。
- 3 東洋『子どもの能力と教育評価』（東京大学出版会、1979. 6）。